別紙資料１

菊桐紋蒔絵鎧櫃について

指定理由

修験者や行脚僧が仏具・衣類等を入れ背負って用いる笈の形式になる木製の鎧櫃である。正面左右の二柱の下端をやや開いて脚とし、背面下部中央にも刳形脚を設けて三脚とする。内部は上下二段に分けられ下段に浅い抽斗を納めるが、上下段とも召合わせのない観音開きの扉を蝶番でとり付け、琵琶形の帖木をあてて閂とする。中央と下部の框には背負うための紐通しの穴各二をあけるが、背負い紐は欠失している。架木・框・柱に八双金具、扉と柱をつなぐ蝶番金具、櫃本体の角を保護する花先金具など、要所に金銅製飾金具を打つ。

表面は、総体を黒漆塗とし、絵梨地を交えた金の平蒔絵で菊紋と五七桐紋を表し、花弁等の輪郭線に、金蒔絵で細線を表す付描、蒔絵部分を針で引っ掻いて黒い線を表す針描、黒線の部分を避けて蒔絵を施す描割の技法を適宜併用する。菊花の表現は、表や裏など変化に富み、大小の菊桐文を重なり合うようにリズミカルに散らす文様構成は、おおらかながらも配慮が行きとどいている。金の平蒔絵、粗い金粉による梨地、細かい金粉による梨地の三色を、菊花や桐の葉、虫喰い穴等の各部分にバランスよく配するなど、本作の蒔絵装飾は、桃山時代に盛行したいわゆる高台寺蒔絵様式の特徴をそなえており、京都市高台寺霊屋内陣や高台寺伝来の什器類に認められる様式と近似するものである。

一方、入八双金具と花先金具には桐紋と唐草、蝶番金具には桐紋を蹴彫りで表す。これらの文様の間地は魚々子地とし、黒色にみえるのは墨差しとみられる。黒地に金色の文様が映える効果を狙ったもので、とくに桃山時代以降に流行をみせた色彩表現である。

金具の最大の特色は、唐草の葉に葉柄（葉背の主葉脈）を表すこと、茎の葉が派生する箇所に二条刻線で節を表すこと、間地に露を散らすこと（とくに蝶番金具に顕著）である。これらは、文禄から慶長年間、桃山時代の飾金具に特有の意匠表現で、滋賀県長浜市都久夫須麻神社本殿（国宝）、京都市高台寺霊屋（重文）、仙台市大崎八幡宮本殿（国宝）など、当該期の遺構の飾金具に類例を見ることができる。本作品の年代観の一根拠として、以上の飾金具を挙げたい。

『豊公御遺物目録』（大正から昭和初年ごろ編纂か）に記載され、天正 12 年（1584）

の小牧・長久手の戦いの際、羽柴秀吉が犬山城に入城してきたときに持参したと伝えられる。犬山城に伝来し、明治時代以降は成瀬家の所蔵となったが、平成16年4月の財団法人犬山城白帝文庫設立時に、成瀬正俊氏から犬山城白帝文庫に寄贈され現在にいたっている（平成25年4月、犬山城白帝文庫は公益財団法人に移行）。

この鎧櫃は、蒔絵装飾、飾金具ともに、典型的な桃山時代の作行（さくゆ）きを示しており、現在知られる類品と比べても何ら遜色のない優品とみなされる。保存状態も良好であり、愛知県指定文化財にふさわしい価値を有するものと評価する。

菊桐紋蒔絵鎧櫃（正面）

公益財団法人犬山城白帝文庫提供

菊桐紋蒔絵鎧櫃（内側）

公益財団法人犬山城白帝文庫提供